

# 原発事故災害の異様さを実感

## 福島県相馬地方ボランティア報告

2011年8月9-12日 青木こうじろう



2011年8月9-12日、福島県相馬地方でボランティア活動に取り組みました。一緒に参加したのは、日本共産党八幡市会議員のいわお博さん、日本共産党山城地区委員長の谷口さん、京田辺市在住のSさん、で計男性4人です。

片道 820~30 キロ。往復に丸2日、現地での活動は 10、11 日の二日間でした。南相馬市にある日本共産党ボランティアセンター（写真・福島原発から北へ23キロの距離）を拠点に取り組みました。その報告をまとめました。

## はじめに

12日の夕方、福島県南相馬市での2日間のボランティア活動を終えて帰ってきました。

9日の朝6時半に京田辺市を出て、八幡東インターから第二京阪、京滋バイパス、名神、北陸、磐越、東北道の二本松インターへ、そこから車で2時間かけて夕方5時半過ぎに、南相馬市にある日本共産党ボランティアセンター（福島原発から北へ23キロの距離）へ到着しました。片道820～30キロの道のりです。

下の写真は日本共産党ボランティアセンターにあるコピー機。これは今年5月頃に京田辺市内の方が仕事で使っていたのをもう使わないから利用してほしいと寄付をされたもので、しっかり役立っています。



そして現地の日本共産党の事務所へ1泊、日本共産党ボランティアセンターへ2泊して、10日、11日は南相馬市鹿島地区、相馬市で住民のみなさんの被災の状況や要望、お困りごとなどの聞き取り調査に、朝10時から午後4時頃まで取り組みました。その後は、地域の人に案内してもらい海に近い地域で津波被害の状況などを教えていただきました。

12日は午前3時20分頃、震度4の地震があつて目が覚めました。元々、渋滞を避けて午前5時にボランティアセンターを出発する予定だったので、準備をして現地を出発。来たときの道を逆にたどり、幸い大きな渋滞もなく午後3時半過ぎに京田辺市へ帰ることができました。総走行距離は1820キロ、現地で160～80キロく

らいは移動したことになります。

ボランティア活動を終えて思うことは、津波による被害の凄まじさも衝撃的でしたが、それ以上にショックを受けた原発事故による災害の深刻さです。右の写真は、南相馬市に到着した日の夕方のTVニュースですが、普通に画面にその日の県内各地の放射線量測定の値がテロップで流れています。地域の方はみんなこれを見ながら暮らさざるをえないのです。



そしてみなさんのお話を聞き、飯舘村を通りぬけたりしていろいろと見てきた中で、改めて原発事故災害の被害の異様さ、他の災害の被害とはまったく異なる独特の、そして深刻な被害の大きさを実感しました。

## ◎見えない原発事故災害



9日、福島県二本松インターで東北道をおりてから、日本共産党ボランティアセンターのある南相馬市への道を確認するために、すぐ近くにある二本松市役所へ立ち寄りました。その時、私が車を停めた市役所駐車場の一面に、車1台分のスペースをつぶしてフェンスで囲まれた機械が設置してあります。（左の写真です）

職員にお聞きするとこれは福島県が設置した空間放射線量測定器で、アンテナでデータを自動送信するとのこと。二本松市役所は福島原発から56キロ離れた山の中にありますが、それでもこうして日常的な測定を余儀なくされています。

二本松市から南相馬市へは、最短ルートはまっすぐ東へ向かう県道62号線です。この62号線は飯舘村（南相馬市の西隣にあります）の南端を通る道路ですが、いわゆる山道で山を曲がりくねっており、飯舘村に入っ

てから迷ってしまいました。

後で地図を確認すると、長方形に近い飯館村の南端の真ん中辺りから、北上する道を通って、草野という交差点（地理的には飯館村の中心辺り）で南相馬市へ向かう県道12号線に入って到着していました。

この飯館村は全村避難のため、無人の村となっています。ある四つ角に「災害対策基本法に基づく車両通行止」の看板があり（左の写真）その周囲にGSや何軒か家がありました。みな無人です。この写真をとった場所も実は普通の民家の真ん前ですが、まったくひと気がありませんでした。

家そのものはそう古ぼけていないし、傷みも見当たらないのにひと気が全然ない。途中には「小宮」という集落を通りそこには簡易郵便局があって2、30軒の家が集まっていたが、

どれも無人で田んぼは草がぼうぼうの状態。原発事故災害による放射能汚染の怖さをじわじわと感じました。

結局、30分くらい飯館村を走行しましたが、他の車や人影を見ることがなく、草野の近くでようやく対向車が来たので、止まってもらい道を教えてもらいました。



12日の帰りは県道12号線をずっと走行しました。12号線は飯館村の真ん中辺りを東西に横断する道で、草野の交差点の辺りには家もたくさんありましたがみな貼り紙をして避難しており、走行している車はあるものの家の辺りに人影は見当たりません。

ぱっと見は、何の変哲もない緑豊かな山の中の農村地帯で、家や建物などにも特に破損も見当たらないにもかかわらず、誰もいない、そして田んぼはどれも草が伸び放題。何とも不気味な風景でした。一つの村全部が丸ごと避難するとはこういうことなんですね。

5ヶ月前の原発事故のことを知らなければ、なぜここに人がいないのか丸でわからないでしょう。

改めて原発事故による被害は、人間社会、地域社会そのものを破壊する危険性をもつという日本共産党の「原発提言」の指摘、被害がどうなるかを空間的、時間的、社会的に限定することは不可能という「異質な危険」がある、ということの意味を思い知らされました。

そしてその危険が現実のものとなった、今回の原発事故災害の異様さ、異質さを実感しました。

## ◎生活をじわじわ壊す原発事故災害

10日は南相馬市鹿島地区の山沿いの農村地域で、11日には相馬市の相馬駅から少し東側の住宅街で、それぞれ聞き取り調査を行いました。鹿島地区の農村地域は福島原発から35キロ、海からは10キロ離れた山の中です。相馬市の市街地は福島原発から43キロ、海からは松川浦という入り江をはさんで5キロ離れており、どちらも津波の被害を受けなかったところです。だから外から見た限りは、家屋も大半はそう大きな被害もなく「ボランティア活動」というのがピンとこない所です。特に鹿島地区の農村部は3月11日の地震の被害も少なく、家の中で皿が何枚か割れたとか、それくらいの話しかありません。しかしその農村部でも、原発事故災害のため今年は作付けをしないと決めているから田んぼは草ぼうぼうです。（右の写真）



そして家を訪問して話をお聞きすると、どの家もみな、放射能汚染を恐れて避難の経験をしています。しかも自主避難なので、開始時期も避難期間も避難先もみなばらばらです。早い人は原発事故の翌日に避難し、多くは3月末までにはいったん避難しています。避難期間も一週間とか10日間、半月間とか長い人だと4ヶ月近くです。避難先もみな自分で確保しており、親戚などを頼って、新潟、山形、栃木、宇都宮などでした。

後で地元の方にお聞きすると、鹿島地区では元の人口は1万2千人だったのが今は避難して8千人くらいに減っているとのこと。一方、相馬市では逆に3万8千人の人口が南相馬市などから避難してきて4万人に増えたそうです。私たちが訪問した住宅地にはけっこうアパートもあり、震災前は空き室が多かったそうですが、今ではほとんど埋まっているとのこと。でもそういう相馬市にも、より遠くへ避難している方がいるわけです。

そして避難から戻ってきた理由はいずれも共通していて、「仕事があるから戻らざるをえなかった」ということです。中には「戻りたくなかったけど仕方ない」という方や、息子夫婦と同居の6人家族だったけど、お嫁さんが1才と4才のお孫さんをつれてさらに北側の新地町(宮城県との境にある福島県の町でその役場は福島原発から51キロの距離)にある実家へ避難して家族が別れて暮らしている方もいます。

いずれも福島原発から30キロ以上離れているから自主避難となり、何の補償もないから暮らしのために戻ってこざるをえないわけです。

仕事の問題は、原発事故災害の複雑さを浮き彫りにしています。一般的な自然災害なら、地域が丸ごとダメージを受けても、徐々に復興し、それに伴い仕事先も復活して、人が戻ってきて働きながら生活再建、という計画が描けます。

でも原発事故災害で、この先、20年とか30年、住んでいた地域に戻れなくなったら、いったいどうやって働き先を確保すればいいのでしょうか。また放射能被害を恐れながらも、働くためには危険を感じながら住み続けるしかないのか、という問題もあります。

避難していたけど仕事がないから戻れない、というのが自然災害といえるでしょうが、危険で避難していたけど仕事があるから戻らざるをえない、というのが原発事故災害なのです。

「原発さえなければ・・・」、この言葉にずしりと重いものを感じます。



左の写真は南相馬市にある日本共産党ボランティアセンターの駐車場で測定した放射線量。この簡易測定器は日本共産党として5、6個貸し出しなどを行っているそうです。測定値は一時間当たり0.4マイクロシーベルト。

## ◎聞き取り調査から

南相馬市と相馬市での聞き取り調査で、実際に住民の方からお聞きした生の声を私のメモにしたがって、そのままお知らせします。

○南相馬市・70才くらいのおばあさん。

飯館村の小宮簡易郵便局の近くに住んでいて、一家4人で避難してきた。6/26にここの離れが運良く見

つかったので来た。そのときに内部被爆の検査もしてもらった。

小宮では親牛5頭子牛4頭の牛を飼っていた。飯舘では稲わらはみな屋内に保管していたのに。米を作らないと稲わらもできない。牛1頭で1年で3反分のわらがある。去年までは百姓をしていたのに残念でならない。飯舘はいいとこだったのに。畑を耕せば食べていけたのに、これからどうなるか。ひ孫が生まれたけども孫夫婦は福島市にいて新潟へ避難しようかと話している。

○南相馬市・50才くらいの女性。

3/15に猪苗代町にいる娘が避難した方がいいと言うので栃木にアパートを借りて一家6人で避難した。後から娘も来て7人になった。そのアパートは今も借りたまま、また自主避難しようかと迷っている。息子夫婦も一緒だった。4歳と1歳の孫がいて、二人の孫は嫁が連れて嫁の実家のある新地町に避難したまま。4歳の孫は今年から幼稚園で、地震の頃は入園式の準備とかしていたのに、避難などで余り通えていなくて不憫だ。

夫は配達の仕事をしており戻りたくなかったが仕事があるということで戻らざるをえなかった。息子も相馬市で働いていて戻ってきた。

私らは放射能だけもらって何の補償もない。家族で家を除染してもらおうかどうしようかと相談している。業者に頼むと50万円から100万円かかると言われて迷っている。田んぼも7町歩あるが何もできない。窓も開けられない。これがいつまで続くのか。東電からは何もない。どこに怒りをぶつけたらいいのかわからない。東電の社長にここに住んでみろと言いたい。

私の実家は海沿いで、兄夫婦は津波が来たときに海岸沿いの高台にある地区のグラウンドに逃げたがそこで津波に襲われて亡くなった。

○南相馬市・60才くらいの女性

3/20頃から8日間、山形へ避難していた。畑をやっていたが、うちの庭でも放射線量が0.6だと言われたが、見えないからわからない。原発さえなかったらここはなんもないとこ。津波もなかった。地区には子どもをつれて他所へ避難している人もいる。

○相馬市・60才くらいの男性

地震や津波では特に被害ない。地元の市会議員がきて家の周りの放射線を測ってくれた。0.4くらいだった。見えないから困る。小さい子どもがいるところは神経質になっているが、気にしない人も多い。

右の写真は日本共産党ボランティアセンターにある相馬地方の地図。

20キロ、30キロ、などの円が書いてあります。

○相馬市・70才くらいの女性

息子夫婦は岩手県へ避難したまま。夫と私だけ残っている。住宅ローンの返済を1、2年猶予してもらったが、生活していけるか不安。水も毎日買っている。水道の水は風呂と米とぎくらい。キュウリ、茄子なども買っていない。刺身も信じられなくて食べれない。子どものいる家庭はもっと敏感。

嫁は南相馬市で保育士をしているが、預かる子どもがみな避難していなくなったので仕事を辞めた。息子は南相馬市に仕事を持っているが嫁は危ないから辞めてほしいと言っている。



○相馬市・50才くらいの男性

3/12から3/22まで新潟の息子のところへ避難した。そこでスクリーニングもしてもらった。その近くの体育館にも避難してきた人が一杯いて、それを見ているとぼやっとしてられなくて生まれてはじめてボランティアをした。

相馬市にも自主避難した人はいっぱいいる。きちんと補償すべきだ。コンパスで円を書いて区別するやり方はおかしい。ただ市からはもらいたくない。国と東電がすべきだ。俺はふざけるなど憤っているんだ。

○相馬市・50才くらいの男性

小さい子どもがいるから安心しておれん。うちの庭で放射線量が0.4。ぜんぜん値が違う。それをどうにかしてほしい。息子は大阪で接骨医をしていて、こちらへ帰ってきて開業すると前は話していたが、原発事故があってやめろと言っておいた。孫はまだ2歳なので。補償金も出るとか出ないとかいう問題もあるが、お金で解決できないこともある。原発の元をたたないとだめ。

○相馬市・30才くらいの女性

3月末から半月ほど群馬の兄のところへ親戚中で避難していた。子どもは幼稚園と小学校と中学校。小さい子どもがいるから不安が大きい。子どももストレスがたまっている。市は結局何もしてくれない。市長は大丈夫だと言うけど何かあったら責任取れるのか。海にもプールにも入れない。子どもが一番かわいそう。

上の子は今度高校受験だけど、来年は南相馬の方の高校が閉鎖されているのでこちらの高校へ集中して定員を140人以上はみ出すと聞いた。以前は仙台の私学へ通うこともできたが鉄道が復旧しないからそれもできない。子どもは高校へいけるかと心配している。迷惑をこうむっているのは子ども。



左の写真は南相馬市の原ノ町駅のすぐ近くの踏み切り。福島原発のすぐ横を通る常磐線の復旧はできるのでしょうか。

○相馬市・30才くらいの女性

家が津波で流されて仮設住宅に7人で入っていた。私らは公営住宅の空きに入れたが、おじいさんとおばあさんは仮設にいる。ただ色々あって土日以外はここへいる。子どもは小1、小4、中2。小学生の子はバスで南相馬市の小学校へ通っているが慣れるまで大変。小4の子が間近で津波を見ており、そのときのことを思い出して不安になってしがみついてくることもある。

放射能の不安ある。子どもの方がTVを見ていて怖がる。特に中2の娘は野菜とかぜんぜん食べなくなった。食べ物のことが一番心配。

○相馬市・60才くらいの女性

原発だけなんだけどね。静岡で孫が去年の夏に生まれてまだ一度も顔を見ていない。ほんとならこのお盆に帰ってくる予定だったけど、帰ってこなくていいと言っている。原発だけ止まってくれたらいいのに。

仕事先は海沿いで職場は津波で流された。9月から再開すると連絡あったが、海の方は怖くて行けない。

○相馬市・70才くらいの女性

地震で家の屋根が壊れて雨漏りが心配。大雨の時に瓦屋が来てくれてシートをかけてくれたけど。修理にいくらかかるかわからないし、年金暮らしなのでどうしたらいいのか。家のローンも残っているので大変。

○相馬市・50才くらいの女性

3月下旬から7/10まで4ヶ月近く宇都宮に避難していた。せめて旅費くらいは出してほしい。相馬は原



発事故で何もなかったと線引きされているがおかしい。一軒一軒きちんと放射線量を測ってほしい。きちんと測って、避難したところは補償してほしい。

みなで避難していたが夫だけ仕事があるので一足先に戻った。野菜をどれだけ食べたらいいのか、水とか大丈夫なのかかわからない。情報を知らせてほしい。

左の写真は相馬市の海沿いの地域。あたり一帯が根こそぎ津波で流され、家の土台だけが残り、遠くまで見通せるようになっています。

◎津波被害の凄まじさ

10、11日と、聞き取り調査が終わった後に地元の方に海沿いを案内してもらい、津波の威力が以下に凄まじいものだったかを教えていただきました。

津波が襲ったところはきれいに何もかも流されています。右の写真は南相馬市の海から700mくらいのところから海岸を写したものです。

これだけ見るとなんだか造成が終わったばかりの工業団地か何かのようですが、地元の方によると本来、ここからは家などがあって海岸線はあまり見えなかったそうです。そして海岸線にもこの時は松が一本しかありませんがずらーっと松林があったのですがそれも全部流されたそうです。



いくつか瓦礫が残されているところもありますが、瓦礫が運び出されると何も残っていません。



左の写真は「鳥崎」という地域で、この公民館です。ここにも公民館の周りにあった家が全部流されて残っているのはこの公民館の建物だけですが、それも外壁しか残っていません。

もう1枚の写真は公民館1階部分ですが、海とは反対側にある壁が外へ向か

って膨らんでいます。

津波は海沿いの高台を乗り越えています。右の写真は海に面した崖から下を撮ったもので、70センチくらい地盤沈下しているとはいえ海面までは20mはありそうです。

このすぐ側に別荘が建っていたのですがその家も丸ごと流されました。





(左の写真がその跡です) そしてそこから20mくらい離れた所にはこの地区のグラウンドがあり、地震の直後、近所の方が津波が来るかもと、その高台にあるグラウンドへ40人くらい避難していたそうです。しかし津波は海面から20mくらいの高さをそのまま乗り越えて家やグラウンドまで押し流し、避難していた人で助かったのは3人だそうです。

相馬市の海岸沿いは海水浴場として賑やかなところだったそうですが、ここも軒並み流されています。下の写真は何とか残ったガソリンスタンドとそのすぐ近くにあるスーパーの建物です。



この周囲はかなり家が多かったそうです。ガソリンスタンドの向い側には家の土台が残っていました。前のページの一番上の写真は、ここで撮影しました。

そのすぐ近くにある、ごく普通の道路標識ですが、その下の部分が折れ曲がっています。あの高さを津波が通っていったということです。(左下の写真)



相馬市には「松川浦」という入り江があります。東西1.5キロ、南北4.5キロ四方くらいの内海があり、外海と隔てている「大洲海岸」はかつては白砂青松の美しい景観をもつ砂浜で、道路と松林、そして堤防があったそうです。津波によってそこも壊滅し、松林はほとんど流され、一部で



ますが、海岸そのものまで切れています。右の写真は内海である「松川浦」に面したところから、「大洲海岸」を写したものです。

写真の中央辺りが海岸そのものが流された部分で、外海が直接見えます。この海岸は幅が100m以上あるようですが、それがほぼ200mにわたってすっかり無くなっています。その下の写真は堤防が切れた辺りを拡大したのですが、左側の松の木の根元付近に白いものがあるのが分かるでしょうか。これはマイクロバスで、津波が一度陸へ押し寄せた後の引き潮の時にマイクロバスが流されてあそこで止まったものらしいです。



このあたりの海は家が流されたままのものもあります。(左の写真)

そしてこの辺も70センチほど地盤沈下しており、道路と海がほぼ同じ高さになって迫っています。(右の写真です。左の、海の中に





あるのはマイクロバスの屋根です)

ちょうど満潮の時間帯だったことかもしれませんが、これだけ海と道路の高さが同じだと、大潮の時や台風などの時には冠水するおそれがあります。



最後の写真は流されて田んぼに船がごろごろ転がっている様子です。ここは海沿いに漁港があり、海から3キロ離れた辺りですが、ぐるっと見渡せる範囲に大き目のボートなどを含めれば20隻以上の船がありました。

## ◎ボランティアの食事など

ボランティア活動報告の最後に番外編として、現地での宿泊、食事、お風呂のことなどにふれます。

私達は男性ばかり4人だったので、南相馬市の日本共産党事務所や、党ボランティアセンターに泊まりました。どちらも6～8畳くらいの広さの部屋で畳もあり布団も借りて寝泊りしました。

女性のボランティアの場合は、南相馬市のボランティアセンターの近くにあるビジネスホテルなどを紹介してもらえます。料金は3千～5千円くらいからあります。

お風呂はそれらのホテルなどの浴場が1回400円～500円で利用できるもので、私達も着いたその日から毎日、入りに行きました。近くにはコインランドリーもあるので、洗濯等も出来ます。

食事についても普通に外食できます。着いた9日の夜は党事務所の近所のラーメン屋、10日の朝はボランティアセンターで炊き出し、昼は聞き取り調査をしている地域にあるスーパー（品物もそろっており、日常生活に必要なものはだいたい売っています）で弁当などを買いました。夜は近所のお好み焼き屋さんです。

11日の朝は近所のコンビニで買いました。昼は聞き取り調査をした地域にあるファミリーレストラン、夜はとんかつ屋さんで定食を食べました。

お店などは閉鎖したままのものもあったり、営業時間を短縮したりしているものもありますが、車で移動していれば、そう困ることはありません。

※この報告書は私のブログ「青木こうじろうブログ」に掲載したものを編集しなおしたものです。